



大友宗麟と  
府内のまち

大分市教育委員会

## ■はじめに

1998年に国指定史跡大友氏館跡おおともしやかたあとの発掘調査はっくつを始め、20年後の2018年には大友宗麟おおともそうりんの生きた時代を体感できる施設として「南蛮BVNGO交流館」を開館しました。2020年春には大友氏館跡庭園の復元整備が完了し、2021年には大友氏遺跡が国指定史跡となり20周年を迎えました。大友宗麟生誕500年となる2030年にむけて、大友氏館跡の整備が本格的に始まっています。

豊かな大分市の歴史が、発掘調査や戦国時代に記しるされた書物などの研究をとおして、日々新たに更新こうしんされています。ふるさと大分の新たな魅力みりょくを発見すること、そして発信することを、これからも続けていきます。

この「大友宗麟と府内のまち」は、これまでの発掘調査の成果や研究の結果をまとめた冊子です。市内の小学校6年生に配布している郷土学習資料きょうど「府内から世界へ大友宗麟」の内容をさらに深め、大友宗麟の人物像や南蛮文化が栄えた豊後府内ぶんごふないの様子などについてよりくわしく紹介する内容となっています。

この冊子をとおして、大友宗麟や大友氏遺跡をはじめとするふるさと大分の魅力ある歴史や文化ふに触れ、理解を深めていただき、郷土に対する愛着や誇りがさらに高まっていくことを期待しています。

2026年5月1日  
大分市教育委員会  
教育長 粟井明彦

《目次》

はじめに

第1章 豊後国を治めた大友氏 ..... 03

第2章 大友宗麟の人物像 ..... 06

第3章 宗麟の国づくり ..... 14

第4章 府内のまちと大友館 ..... 26

第5章 府内に花開いた南蛮文化 ..... 37

第6章 府内の人々のいのり ..... 46

資料 大分市内の文化財・史跡 ..... 56

参考文献一覧 ..... 67

■冊子の記述について

- ・歴史上のできごとの名称や、国名、漢字の使い方などは教科書の表記に従っています。
- ・人物名は一般的な呼び名で通しています。

(表紙)

国指定重要文化財

びやくだんぬりあきぎいとおどしほらまき かぶと おおそで こぐそくつき  
白檀塗浅葱糸威腹巻 兜・大袖・小具足付

大友氏が奉納したと伝えられています。かぶとは椎の実型をしており、南蛮かぶとの影響を受けたものといわれています。(柞原八幡宮蔵)

第1章 豊後国を治めた大友氏

1 大友氏400年

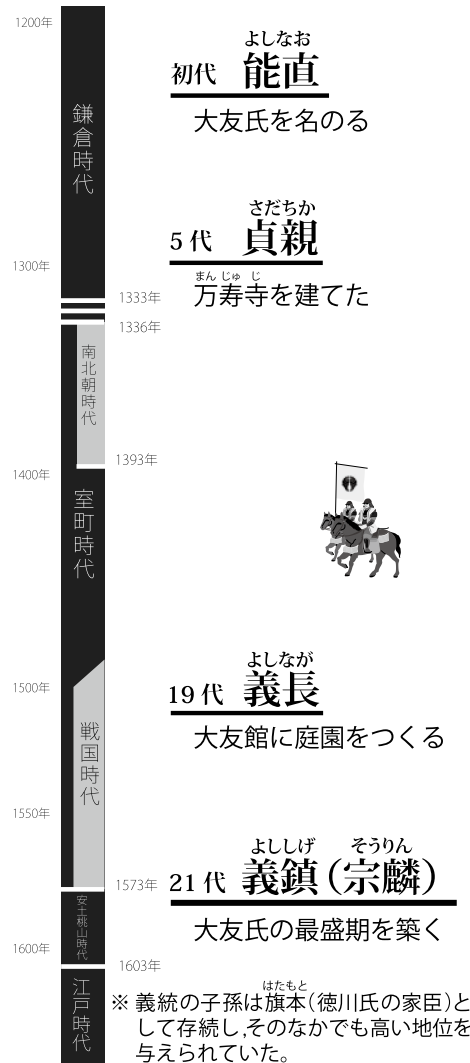


よりやす  
3代 頼泰  
中国(元)と戦った

ちかよ  
10代 親世  
現在の場所に  
大友館を建てる

よしあき  
20代 義鑑  
宗麟の父  
戦国大名の  
基礎をかためる

よしむね  
22代 義統  
大友家の  
作法日記を記す



## 2 大友氏の主な当主

### 初代 大友能直

相模国(神奈川県)の大友郷(現在の小田原市の一部)を領地としたことから、「大友」氏を名のりました。源頼朝の御家人(家来となった武士)として活躍した人物で、頼朝の大変なお気に入りであったといわれています。その活躍により、豊後国(大分県)の守護(国ごとに置かれ、軍事・警察の仕事にあたる役職)に任命され、以後大友氏は江戸時代の直前まで約400年間にわたって豊後国を治めました。

### 3代 大友頼泰

鎌倉時代に起きた中国(元)との戦いで、九州の御家人を率いて戦いました。頼泰の墓は、現在の大分市岡川に残っています。



▲3代頼泰の墓(大分市岡川)

### 5代 大友貞親

鎌倉幕府の執権(将軍を補佐する役職)に「小さな寺を造り、百人の僧がいます」と答えてしまったため、豊後に帰国後、現在の大分市元町に万寿寺を建てたといわれています。

### 10代 大友親世

室町時代に起きた南北朝の動乱で一族をまとめて戦い、おとろえかけていた大友氏を復活させました。

大友館(現在の大分市顕徳町にある大友氏館跡)は、親世のころにはじめて建てられたと考えられています。

### 19代 大友義長

次の当主をめぐる争いなどで混乱していた大友家を、父である18代親治とともに立て直しました。大友氏の家法(家のおきて)である『大友義長条々』を定め、「將軍に忠節をつくすこと」「神や仏を敬うこと」「家族を大事にすること」などを説きました。

### 20代 大友義鑑

宗麟の父で、室町幕府とつながりを深め、戦国大名としての基礎をかためました。三男の塩市丸をあとつぎにしようとしたことがきっかけで「二階崩れの変」が起こり、家臣に命をうばわれました。

### 21代 大友義鎮(宗麟)

ポルトガル商人などとの南蛮貿易を盛んに行い、豊後府内(大分市)を国際貿易都市として発展させることで力をつけ、北部九州6か国の守護となり、大友氏は最盛期をむかえました。10歳で元服(大人として認められること)した後は義鎮、32歳で出家(髪をそって仏の道に入ること)した後は宗麟と名のりました。

### 22代 大友義統

宗麟のあとをついで、豊後国を治めましたが、朝鮮侵略のときに、味方の軍を助けることができなかったという理由で、豊臣秀吉から領地を取り上げられました。その後、大友家の行事や作法などをまとめた『当家中作法日記』を記しました。

## 第2章 大友宗麟の人物像

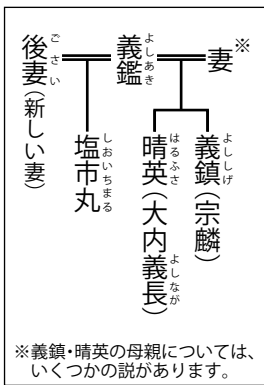
### 1 生い立ち～当主になるまで

宗麟は1530年、大友氏20代の当主義鑑の長男として生まれました。幼いころの名前を塩法師丸といい、大友氏のあとつぎとなる地位にありました。

10歳の時、宗麟を産んだ母が亡くなりました。父義鑑は、新しい妻を迎え、塩市丸という子どもが生まれました。新しい母は宗麟よりも実の子どもの塩市丸を大事にしました。

義鑑も、塩市丸の方があとつぎにふさわしいのではないかと考えるようになり、そのことが大友家をゆるがす大事件へとつながりました。

江戸時代に書かれた本には次のように書かれています。「1550年2月、義鑑は宗麟の家臣である齋藤・小佐井・津久見・田口の4名を館に呼びよせ、宗麟ではなく三男塩市丸をあとつぎにすることを伝えた。4人はこれを不満に思い、退席した。義鑑は怒って、齋藤・小佐井の2人を殺させた。残りの津久見・田口の2人は館の裏門からかけ入り、二階の間で塩市丸とその母を殺し、義鑑にきずを負わせた。館にいた他の家臣が



※義鎮・晴英の母親については、いくつかの説があります。

▲宗麟の親族関係

津久見と田口を討ちとつたが、義鑑のきずは深く、2日後に死去した。」

江戸時代の本では、このできごとを「二階崩れのへん変」と呼んでいます。

このとき、宗麟は別の場所(現在の別府市浜脇周辺)に出かけており、すぐに府内にもどってこの事件をおさめ、混乱していた家臣たちをまとめました。

こうして宗麟は大友氏の21代当主となりました。このとき、宗麟はまだ20歳の青年でした。

### 2 同じ時代に生きた武将たち

宗麟が生きた時代は、全国各地で戦いが続く「戦国時代」でした。この時代には、大きく勢力をのぼし、全国に名が知られる戦国大名も多く現れました。宗麟もこうした戦国大名の一人でした。

宗麟は、川中島の戦いで知られる上杉謙信と同年です。また、天下統一を目前に本能寺で命をたつた織田信長より4歳上、天下統一を成しとげた豊臣秀吉より6歳上、江戸幕府を開いた徳川家康より12歳上です。

毛利元就	1497	織田信長	1534
武田信玄	1521	島津義弘	1535
大友宗麟	1530	豊臣秀吉	1536
上杉謙信	1530	徳川家康	1542

▲戦国時代の有名な武将の生まれた年

### 3 世界に目を向けた宗麟<sup>そうりん</sup>

#### 《ポルトガル人との出会い》

宗麟がキリスト教の宣教師に語ったとされる思い出話によると、宗麟が15歳<sup>さい</sup>のとき、府内の港に6,7人のポルトガル人を乗せた中国船<sup>ちゆうごく</sup>が入ってきました。



▲ポルトガルから日本までの主な航路

他の船員が、宗麟の父義鑑<sup>よしあき</sup>に「お金もちになりたいなら、ポルトガル人たちから財産をうばいなさい。」と勧めましたが、宗麟は「遠くから商いにやって来た外国人たちを、何の罪もないのにそのようなことをしてよいものか。彼らはこの港を信用して来航したのであって、私はそのような行いに賛成できない。」と反対しました。義鑑はその言葉を聞き、ポルトガル人から財産をうばうことを取りやめました。

また、宗麟の弟晴英<sup>はるふさ</sup>が火縄銃<sup>ひなわじゆう</sup>により腕<sup>うで</sup>に大けがをし、ポルトガル人がそのきず<sup>ちりょう</sup>を治療した、というできごともありました。一緒にいた宗麟は、その技術<sup>いっしょ</sup>に驚き、海外の文化や技術に大変興味を持ちました。宗麟は府内

に住むようになったポルトガル人から、ヨーロッパのことやキリスト教のことなどを聞き、海外の情報を集

めました。

宗麟<sup>そうりん</sup>が若いころにポルトガル人と出会ったことは、その後の宗麟の考え方<sup>えいきよう</sup>に大きな影響をあたえました。

#### 《ザビエルとの出会い》

21代の当主となった宗麟は、翌1551年に山口<sup>やまぐち</sup>にいたフランシスコ・ザビエルへ手紙を送

り、大友館のある府内に招きました。ザビエルは1549年に鹿児島<sup>かごしま</sup>に上陸し、日本へ初めてキリスト教<sup>きりすと</sup>を伝えた宣教師です。その後京都<sup>きょうと</sup>に行き、将軍<sup>しょうぐん</sup>から日本で布教する許可を得ようとしたがうまくいかず、山口<sup>だいまいようおおうち</sup>の大名大内氏のもとで布教していました。

宗麟はザビエルに、「個人的にいろいろなことについて話したいから来てほしい。」と手紙を出しました。日本で布教するには、有力な大名の保護が必要だと感じていたザビエルは、すぐに豊後<sup>ぶんご</sup>へ向かいました。



▲大友宗麟



▲フランシスコ・ザビエル

ザビエルは、現在の日出町の港から船に乗り、府内に向かったといわれています。府内の港にはポルトガル船が停泊しており、ザビエルの到着を祝って大砲を撃ちました。府内に上陸したザビエル一行は、宗麟の家臣たちの護衛のもと、府内のまちの中を、行列を作って大友館に向かいました。

宗麟はザビエルを歓迎し、この出会いを大変喜びました。宗麟は、ザビエルからキリスト教や海外の様子などの話を聞いて感激し、キリスト教の布教を許可するとともに、ポルトガルとの交流を望みました。

ザビエルは2か月ほど滞在した後に府内を離れ、インドへ向かいますが、このとき宗麟は、ポルトガルとの交流を深めるために、おくり物を持たせた家臣を派遣しました。

宗麟とザビエルの出会いをきっかけに、府内ではポルトガル商人などによる南蛮貿易が盛んに行われるようになり、キリスト教の布教も進められました。

有力な大名が、領地をめぐってあらそっていた時、宗麟はアジア、ヨーロッパとの交流をめざしていました。

#### 4 文化人としての宗麟

京都で暮らす貴族は、和歌や蹴鞠などさまざまな教養を身に付けなければなりません。戦国時代

に生きた武将にとっても教養は大切であり、茶の湯(茶をたてて、客をもてなすこと)などをたしなみました。

宗麟も多くの教養を身に付けていた人物であり、特に茶の湯に対する熱心さは京都まで知れわたっていました。

1586年に宗麟が大阪(大坂)城の豊臣秀吉を訪問したとき、わび茶を完成させた人物として有名な千利休が出むかえました。秀吉が利休に「宗滴(宗麟)は茶に数寄か。」とたずねると利休は「なかなかの数寄者です。」と答えました。数寄者とは、茶の湯のことをよく理解している人のことで、宗麟は茶の湯の第一人者であった千利休に認められるほど優れていたのです。

茶の湯をたしなむ人にとって、価値の高い茶道具を集めることは大変大事なことでした。当時の記録には、宗麟がこうした貴重な茶道具を14点も持っていたと記されています。なかでも「新田肩衝」「瓢箪茶入」といった茶入れは有名で、とても価値が高いものであり、他の茶道具も名品ばかりであったと思われます。宗麟には、これだけの茶道具をそろえるだけの豊かな財力があったということになります。

大友氏館跡からも茶の湯で使う「天目茶碗」や茶室をかざる「花入」などが見つかっており、館内で盛んに茶会が行われていたと考えられています。



### 第3章 宗麟の国づくり

#### 1 中央政権とのつながり

宗麟は、中国地方の大内氏や毛利氏、九州の島津氏など、他の戦国大名と争う一方で、室町幕府や織田信長、豊臣秀吉など中央政権と関係をつなぐことで、勢力の拡大を図りました。

こうしたやり方には、豊かな財力が必要であり、宗麟は、中国や東南アジアの国々、ポルトガル商人など海外の勢力との貿易を推進することで、大きな利益を手に入れていたと考えられます。

#### 《室町幕府との関わり》

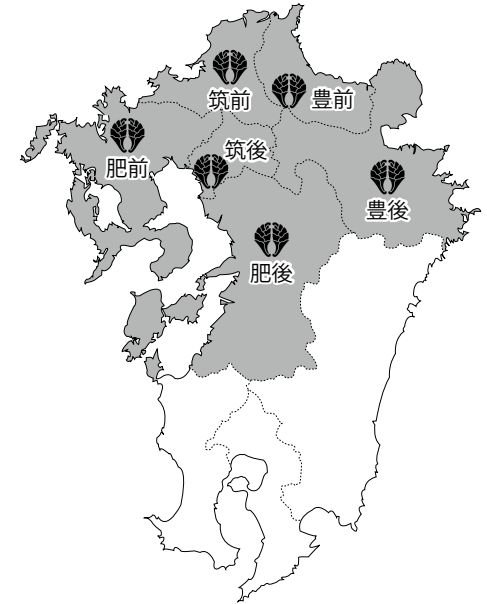
宗麟の父義鑑は、室町幕府や朝廷とのつながりを深め、その権威を利用して領地の支配体制をかためました。将軍には、黄金や刀剣、よろいのほか、トラやヒョウの皮など海外の品々をおくり、将軍からの信頼を得ました。

その結果、義鑑は新たに肥後国（熊本県）の守護に任命され、息子である塩法師丸（宗麟）が元服するときには、将軍「義晴」の一字をもらい、「義鎮」と名づけることができました。

宗麟も父の政策を受けつぎ、将軍と積極的につながりを深めることで勢力の拡大を図りました。宗麟からのおくり物に対して将軍は大変喜び、宗麟は北部九州

6か国の守護に任命されました。

また九州探題（九州全体を治める役職）に任命されるなど、宗麟は九州の支配者として認められました。



▲宗麟が守護を務めた6か国

#### 《織田信長との関わり》

宗麟は尾張国（愛知県）の戦国大名織田信長とも交流を深めました。宗麟は信長に「赤壁賦図盆」という価値の高い中国製のお盆をおくっており、このお盆は現在も名古屋市にある政秀寺に伝わっています。一方、信長からは「鬼月毛」という名馬が宗麟におくられたといわれています。

宗麟は中央の情報を正確に集めており、信長の実力と勢いを早くから見抜いて友好関係を結んでいたのです。

その後、信長は室町幕府をほろぼし、武力による天下統一を進めました。これに立ちふさがったのが、中国地方を治めていた戦国大名毛利氏です。

信長は1579年に、大友氏に周防・長門両国(山口県)の支配権をあたえるという手紙を出しました。これには、信長にとって大敵であった毛利氏を大友氏に後方から攻めてほしいという信長のねらいがありました。

信長にとって、ぜひとも友好関係を結ばなければならない相手が、大友氏でした。

## 2 優秀な家臣団

当時の戦国大名は独断で物事を決定することはほとんどなく、主な家臣たちとの会議で決めていました。

当時の記録によると、「大友氏の家臣たちは日中にみんな集まって会議を開く」とあり、大切なことは主な家臣との会議により決定していたことがわかります。このような家臣たちの呼び名は大名によって異なっていますが、大友氏の場合は「加判衆」と呼ばれていました。「加判」とは書類に署名をするという意味です。

宗麟の家臣には優れた武将が多く、毛利氏や島津氏との戦いで活躍した戸次鑑連(道雪)や、室町幕府や他の大名との関係づくりに力をつくした臼杵鑑速などがおり、大友家の全盛期を支えました。

## 3 鉄砲と「国崩」

1543年、ポルトガル人を乗せた中国船が種子島(鹿児島県)に流れ着き、日本に鉄砲(火縄銃)が伝えられました。その後1556年に豊後に来た中国人が次のような記録をしています。

「ポルトガルの商人が種子島の日本人に鉄砲の造り方を教えた。その後、坊津(鹿児島県)、平戸(長崎県)、豊後、和泉(大阪府)などに伝わり、製造されている。」

戦いを有利に進めるために、各地の戦国大名が鉄砲を手に入れようとするなか、すでに豊後では鉄砲の製造が始まっていました。

宗麟はさらに、強力な武器である大砲をポルトガルから手に入れており、日本で最も早く大砲を所有した大名でした。大砲の威力に驚いた宗麟は、これを「国崩」と名付けたといわれています。

豊後国は、質の良い砂鉄が採れたことから、鑄物(金属製品)を作る技術が発達し、現在の大分市駄原などには、優れた鑄物師集団がいました。なかでも、宗麟の家臣であった渡辺宗覚は、中国に渡って大砲の造り方や使い方を学び、府内で大砲を製造したと伝えられています。



▲大砲「国崩」複製品(大分市歴史資料館蔵)

## 4 九州の覇権争い

### 《大内氏との関わり》

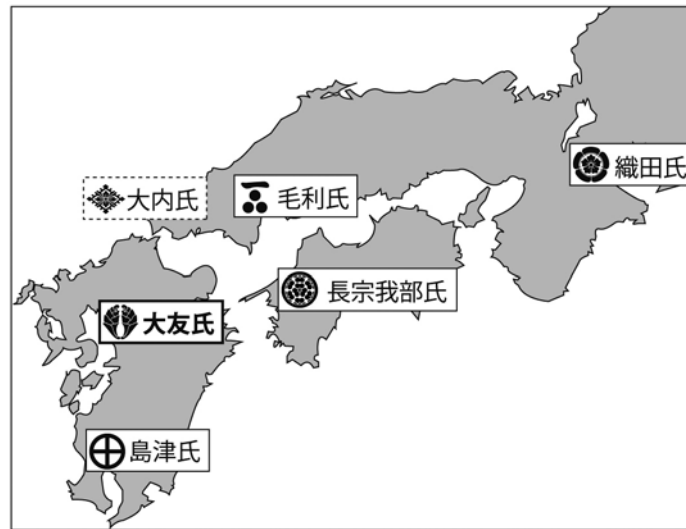
大内氏は、大友氏と同じく将軍から認められた守護大名で、中国地方で強い勢力を持っていました。大友氏と大内氏は、中国や朝鮮と貿易を行う上で重要な場所である筑前国や豊前国の支配をめぐってたびたび争っていました。

1551年、大内氏の当主義隆が家臣の陶晴賢にそむかれ、命をたつという事件が起きました。戦国時代には、実力のある者が力をのぼして上の身分の者に打ち勝つ「下剋上」が全国各地で起こっていました。実権をにぎった晴賢は、宗麟の弟で大内氏の親戚にあたる晴英を新しい大内氏の当主にむかえました。晴英は大内義長と名のりました。

しかし、晴賢も4年後に安芸国(広島県)の毛利元就と戦って敗れ、命をたちました。その後、毛利氏は大内氏をほろぼし、中国地方を治める大名へと成長しました。

### 【コラム】守護大名と戦国大名

鎌倉幕府や室町幕府から守護に任命され、代々国を治めてきた大名を「守護大名」といい、戦国時代に入り、下剋上をとおして力をつけた大名や、守護大名から成長した大名を「戦国大名」と言います。守護大名から戦国大名に成長した有名な武将には大友宗麟や大内義隆、武田信玄などがいます。また、下剋上をとおして戦国大名になった武将には織田信長や毛利元就、上杉謙信などがいます。



▲宗麟に関係する主な戦国大名

### 《毛利氏との戦い》

大友氏は大内氏をほろぼした毛利氏と、九州北部の支配をめぐってたびたび争いました。

毛利氏は、大友氏に反抗する九州北部の勢力に味方し、1568年には海を渡って攻め入ってきました。

毛利軍は博多にまで迫り、大友軍は大軍でこれをむかえうちました。

最終的に毛利軍は博多をあきらめて引きあげ、これにより大友氏は、北部九州の支配権を確かなものになりました。

### 《島津氏との戦い》

薩摩国(鹿児島県)を本拠地とする戦国大名島津氏は、南九州に強い勢力を持ち、日向国(宮崎県)にまで勢力を伸ばしていました。

宗麟は日向国(宮崎県)にキリシタンの王国をつくりたいという夢を持ち、1578年に大軍で肥後・日向の2方向から攻め込む作戦を立てました。しかし、キリシタン王国の建設という宗麟の夢には反対する家臣も多く、軍のまとまりに欠けていました。

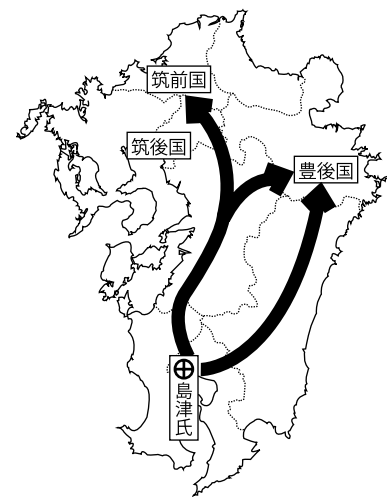
#### 【コラム】

現在の宮崎県延岡市には「無鹿」という地名があります。「むしか」という名前は、この地にキリシタンの都市を建設しようとした宗麟が名付けたものだともいわれています。「むしか」とは、「音楽」を意味するラテン語の「musica(英語のmusic)」に由来するといわれています。

日向国に攻め入った大友軍と、これをはばもうとする島津軍は高城・耳川の戦いにおいて激突しました。まとまりに欠ける大友軍は大敗し、多くの家臣を失いました。

この敗北をきっかけに大友氏の支配力は弱まり始め、各地で大友氏に反抗する勢力が兵を挙げました。

島津氏は、大友氏に反抗する勢力に味方するかたちで勢いを増し、九州北部へと軍を進めました。筑前・筑後国では、戸次鑑連(道雪)や高橋紹運、立花宗茂ら大友軍を代表する3人の勇将が協力し合いながら島津氏と激しい戦いをくり広げました。



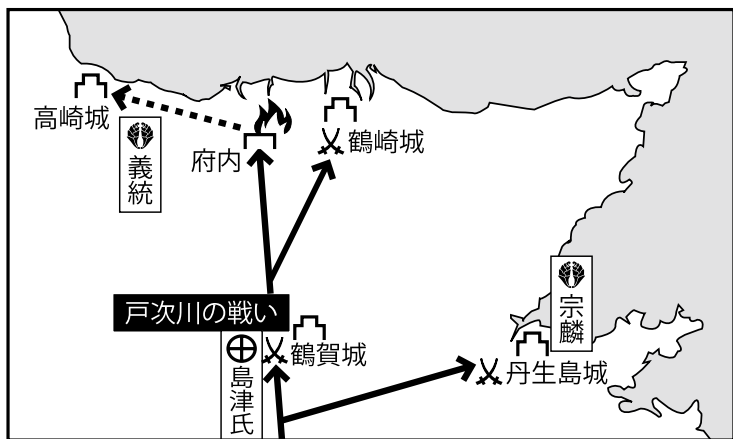
▲島津軍の進路(1586年頃)

### 《豊臣秀吉の援軍》

家臣の明智光秀にそむかれて命をたった織田信長の後継者となり、天下統一を目指していた豊臣秀吉は、1585年に大友氏と島津氏に対し、戦いをやめるよう命令を出しました。

島津軍との戦いに苦しんでいた宗麟は、命令に従うことを伝えるため、自ら秀吉のいる大阪(大坂)城に向かいました。大阪(大坂)城は主な建物がちょうど完成したばかりで、宗麟の訪問を喜んだ秀吉は、自ら城内を案内するなど歓迎しました。

一方、島津氏は秀吉の命令に従わず、大友氏の本拠地である豊後国へ攻め入りました。1586年から1587年にかけて、島津軍は現在の大分市中戸次にある鶴賀城を包囲しました。大友軍と秀吉の命令で援軍としてやって来た四国の長宗我部元親らの連合軍は、鶴賀城の救援に向かい、戸次川(現在の大野川)をはさんで島津軍とにらみあいました。



▲島津軍との戦い

大友・四国連合軍は川を渡り、島津軍へ攻めかけますが、敵の戦法にはまって大敗し、長宗我部元親の長男の信親は22歳という若さで命を落としました。この戦いを「戸次川の戦い」といいます。

大友軍を率いていた義統らは府内へ引きあげ、さらに高崎城(現在の高崎山)へと退きました。勢いに乗った島津軍は府内のまちへ攻め込みました。府内のまちは大混乱となり、多くの建物が焼けました。

島津軍の一隊は、現在の大分市鶴崎辺りにあった鶴崎城も攻めました。城を守っていた吉岡妙林尼は、堀や落とし穴などを造って16回にわたる敵の攻撃を退けたといわれています。

また、宗麟自身も丹生島城(現在の臼杵市にある臼杵城)を守り、島津軍の攻撃を防ぎました。この戦いでは、宗麟は多くの住民を城内に避難させました。



▲吉岡妙林尼の像(大分市鶴崎)

しかし、12月の<sup>きび</sup>厳しい寒さや、<sup>しょくりょう</sup>食糧不足のため、<sup>ひなん</sup>避難生活はととても<sup>きびしい</sup>厳しいものでした。宗麟の娘たちは、自分の着物を切りさいて、苦しんでいる人々に分け与え、宗麟自身も自ら住民の<sup>きゅうえん</sup>救援にあたったといわれています。

やがて、<sup>とよとみひでよし</sup>豊臣秀吉が率いる約20万人の<sup>きゅうしゅう</sup>軍勢が九州に<sup>とうちやく</sup>到着し、<sup>しまづ</sup>島津軍は<sup>ぶんご</sup>豊後国から引きあげました。

## 5 宗麟の最期

九州を平定した秀吉は領地の<sup>わ</sup>割り<sup>あ</sup>当てを行い、<sup>よしむね</sup>義統には豊後一国を<sup>ひゅうが</sup>与え、宗麟には、日向国を<sup>ひゅうが</sup>与えようとしたのですが、宗麟はこれを断っています。

宗麟は、その後流行していた病気に<sup>つ</sup>かかり、1587年5月23日、<sup>つ</sup>津久見の地で57年の<sup>しょうがい</sup>生涯を閉じました。



▲大友宗麟公墓(津久見市)

大分市出身の建築家 磯崎新氏の設計により1977年に造られました。

宗麟の<sup>そうりん</sup>死後、<sup>ぶんご</sup>豊後国は息子の<sup>よしむね</sup>義統によって<sup>あ</sup>治められました。しかし、秀吉が<sup>ちょうせんしんりやく</sup>朝鮮侵略を行ったとき、義統が味方の軍を助けることができなかったという理由で、大友氏は領地を取り上げられました。豊後国は他の大名たちの領地となり、江戸時代になると、現在の<sup>りゅう</sup>大分市は、<sup>はん</sup>府内藩のほか、<sup>うすき</sup>臼杵藩・<sup>ひご</sup>肥後藩・<sup>のべおか</sup>延岡藩・<sup>おか</sup>岡藩・<sup>ばくりょう</sup>幕領(幕府の直接の支配地)などの領地が置かれ、細かく分けられることになりました。

## 第4章 府内のまちと大友館<sup>やかた</sup>

### 1 戦国時代の豊後府内

#### 《府内のまちのつくり》

戦国時代の府内のまちは、現在の大分市の地名で示すと、北は長浜町<sup>ながはままち</sup>、南は元町<sup>もとまち</sup>、西は顕徳町<sup>けんとくまち</sup>、東は大分川の範囲に40あまりの町があり、広さは南北2.1km、東西0.7kmと考えられています。当時は約5000軒<sup>けん</sup>もの家が建ち並ぶ九州最大級の都市でした。戦国時代の日本で有名な貿易都市として、堺<sup>さかい</sup>（大阪府）や博多<sup>はかた</sup>（福岡県）があげられますが、府内のまちは博多よりも広く、堺とほぼ同じ規模でした。宣教師の記録からも、戦国時代末期の日本を代表する都市として、堺、大阪（大阪府）、安土<sup>あづち</sup>（滋賀県）とともに、府内の名も記されており、また、ヨーロッパ人が日本をえがいた地図に「Fumay（府内）」と記されているなど、当時の府内は外国人にも知られる主要な都市だったことがわかります。

「府内古図<sup>ふないこず</sup>」を見ると、まちには東西に5本、南北に4本の道が通っています。道路工事などのときに発掘調査を行うと、現在の道と重なる場所で戦国時代の道が発見されることがあり、400年前の道路がそのまま今に受け継がれているようです。大友館の正面にある南北方向の道路は、道幅<sup>はば</sup>が8～11mもありました。

また、館の北東には中国人などが暮らす唐人町<sup>ちゆうごくとうじんまち</sup>がつくられ、まちのもっとも西側にある道沿いには「府内教会（デウス堂）」や日本初の西洋式病院「府内病院」が建ち並んでいたようです。

#### 【コラム】「府内古図」

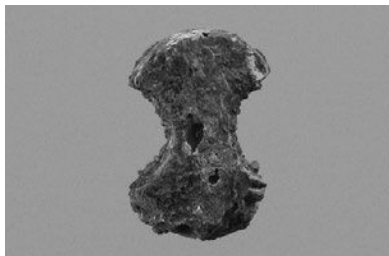
戦国時代の府内のまちの様子を知るための資料に「府内古図」と呼ばれる絵図が複数枚あります。この絵図は江戸時代にえがかれたもので、いずれの古図も1581年から1586年ごろの府内のまちの姿を伝えているものと考えられています。内容の違いなどから、大きくA・B・Cの3つの種類に分けられます。

大友館は以前からこの絵図をもとに場所が推定されていました。1998年にその場所で発掘調査を行ったところ、大友館の一部である庭園跡<sup>あと</sup>が発見され、この絵図が信頼できるものであることがわかりました。他にも、絵図にえがかれている道路やお寺などが発掘調査により見つかっており、調査を行う上で重要な資料になっています。



1595年に大友義統よしむねが大友氏の儀式ぎしきや行事について書いた『当家年中作法日記』には、大工だいこう、鍛冶師かじ（刃物はものや釘くぎなどの金属製品きんぞくせいひんをつくる人）、桶職人おけ、漆塗職人うるしぬり、土器職人などが正月に大友氏当主と対面した記録があり、これらの職人も府内のまちやその周囲に住んでいたと考えられます。

発掘調査により、府内の人々の日常の暮らしもわかってきています。



▲分銅

重さをはかるために使う天秤てんびんや分銅ぶんどうなどの道具や、鍛冶場、布を染める染物屋そめものやのものと考えられる蔵くらの跡あとが見つかっています。

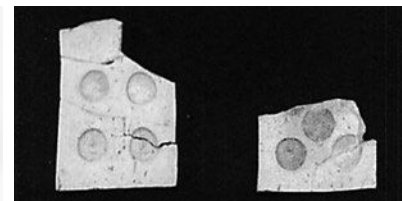


▲かわらけ

また、「かわらけ」と呼ばれる土器、漆を塗った木製のおわんやはしなどの飲食に関する道具なども見つかっています。さらに、当時食べられたとみられる牛やマグロなどの骨から当時の食事の様子がわかります。そのほか、木で作られたコマや羽子板はこいた、「ぎっちょう」と呼ばれる遊びに使われる玉、



▲ぎっちょうの玉



▲骨牌

骨こつぱいを使って作られた「骨牌こらく」などの娯楽の道具も出てきました。

ほかにも花いを活けるのに使う花瓶かびんや茶ちやの湯ゆに使う茶わんなど、現在に通じる文化や歴史をたどることができます。

## 2 府内の玄関口 沖の浜

府内のまちから見つかった食べ物や道具は、外国からもたらされたものも多くありました。戦国時代、府内のまちの海の玄関口として、「沖の浜」という港があり、そこで貿易が行われていました。現在の地名でいえば、大分市住吉町すみよしまちから勢家町せいけまちのあたりと考えられています。沖の浜は府内の港として、当時多くの貿易船が入港していました。宣教師の記録には、豊後の商人はもっとも裕福であったと書かれており、沖の浜での貿易を通して、府内のまちは繁栄していきます。まちの繁栄は、領主である大友氏ほんえいに経済力けいざいりよくをもたらします。大友宗麟そうりんはその力を使い、北部九州に勢力をのばしていったのです。

しかし、沖の浜の繁栄は長く続きませんでした。1586年に島津軍が府内に攻め入ったとき、府内のまちとともに、沖の浜も焼けてしまいました。そして、1596年には慶長豊後地震といわれる別府湾を震源とする地震が発生し、最大で6mに達する津波がおしよせたとみられています。その結果、沖の浜は一夜にして別府湾の海底に沈んでしまったとも伝えられています。

沖の浜は、江戸時代以降には「瓜生島」という名前でも語りつがれています。

### 3 大友館

#### 《大友館のつくり》

府内のまちの中心にあったのが大友館です。大友館は敷地の中に複数の建物と大きな庭があったことがわかっています。

その中の「大おもて」(中心建物)と呼ばれる建物は、東西約17m、南北約17mに広がる大きさで、政治や儀式が行われる重要な場所でした。

大友館では500人分の料理を準備する大きな行事が開かれ、「大おもて」には、一度に200人の家臣が集まり、食事した記録もあります。

また、大友館には中国などから輸入された高級陶磁器などが飾られていたと考えられています。さらに、有名

な画家でのちに安土城や大阪(坂)城の障壁画(ふすまや屏風などにえがかれた絵)をえがいた狩野永徳が招かれ、大友館の内部の装飾に関わったと考えられています。



▲梅瓶のかけら

中国の元時代に作られた壺で、当時の日本では高級品でした。府内のほかではあまり見つかっていません。

#### 《大友館の歴史》

この広大な敷地をもつ大友館も、最初から大規模ではありませんでした。また、鎌倉時代に大友氏が豊後に移ったころ、どこに住んでいたのかもわかっていません。しかし、発掘調査により、少なくとも10代親世のころには現在の位置に大友館がつけられたことがわかっています。そのころの館は、宗麟のころに比べれば小規模だったようです。

その後、館の敷地は広がっていきました。宗麟・義統のころの大友館は一辺200mほどの広さになり、最盛期をむかえます。

しかし、1586年に島津軍が府内に攻め入ったときに壊され、その後再建されませんでした。

1593年に大友氏が豊後国から去ったあとは、新たに府内城を中心とするまちが現在の大手町や府内町などに造られました。一方で大友館があった場所は田畑になっていきました。

## 《庭の特徴》

大友館の特徴の一つは、大きな池をもつ庭です。最初の庭は、15世紀終わりごろから16世紀はじめごろにかけて造られました。宗麟・義統の時代、庭には東西67m、南北30mに広がる巨大な池があったことがわかっています。池は中心にある中島をはさんで東と西に分かれており、二つの異なる景色を作っていました。池の東側はたくさんの巨大な石を組み合わせて滝などをつくる迫力のある景色が特徴です。一方、池の西側は巨大な石をあまり使わず、水面を広く見せた穏やかな景色となっていました。池の大きな石は大分川上流の現在の由布市や大分市永興から運ばれました。



▲大友氏館跡庭園

また、発掘調査により、池底から植物の花粉や種が発見され、この庭を彩っていた木の種類が明らかになりました。イチヨウやマツ、カエデなどが植えられていたようです。

織田信長の岐阜城(岐阜県)や大内氏の大内氏館(山口県)などにも大友館と同じように池が造られましたが、それらと比べても大友館の池は規模が大きいのが特徴です。

広い敷地をもった館、巨大な庭、そして建物の中を飾る絵や陶磁器などから、大友氏がいかに大きな力を持っていたのかがわかります。

## 《上原館》

現在の大分市上野の台地上にもうひとつ大友氏の館があり、「上原館」という名前で知られています。大友館は日常生活や政治を行うための館であり、上原館は戦などに備えて守りを固めた館でした。東西約130m、南北約156mの規模で、土塁(敵の侵入を防ぐために土を盛り上げて造った土手)や堀などさまざまな仕掛けがつけられていました。大友氏の城として高崎山の山頂付近にあった高崎城が知られていますが、この当時は上原館から高崎城まで行き来しやすいように道が整備されており、今でもその一部は道路として使われています。

#### 4 大友氏遺跡の発掘

大友氏館跡や上原館跡に加え、旧万寿寺地区、推定御蔵場跡、唐人町跡をまとめて「大友氏遺跡」といいます。特に、大友氏館跡は1998年度からおよそ20年間にわたり調査が行われ、さまざまなことがわかってきました。

旧万寿寺地区は現在の<sup>もとまち</sup>大分市元町にあります。かつて万寿寺があった場所で、発掘調査により規模などが明らかになりました。

推定御蔵場跡は、大友氏館跡の南にあり、<sup>ふないこず</sup>府内古凶(C類)に「御蔵場」と記されていた場所です。蔵や建物など大友氏が管理する<sup>しせつ</sup>施設があった場所と考えられています。

唐人町跡は大友氏館跡の北東にあり、<sup>ちゆうごく</sup>中国人などが多く住んでいた場所と考えられています。発掘調査では、外国から持ち込まれた陶磁器や、ガラス製品など、外国人が住んでいたことを示す品々が発見されています。領主の館のとなりに外国人居住地があるのは珍しく、海外貿易に積極的だった大友氏と府内の<sup>めづら</sup>まちな特徴を示しているといえます。

大友氏遺跡は歴史上の価値が高い遺跡と認められ、国の史跡に指定されています。日本を代表する戦国時代の歴史遺産として保護し、未来へ受けついでいかなければなりません。

## 第5章 府内に花開いた南蛮文化

### 1 南蛮貿易の始まり

15世紀後半、航海術の発達によりヨーロッパの人々は、世界各地に進出するようになりました。ヨーロッパ人の主な目的は、アジアとの貿易とキリスト教の布教であり、16世紀になると、商人と宣教師を乗せた船は日本にもやってきて、日本人と貿易をするようになりました。当時の人々はポルトガル人やスペイン人などを南蛮人と呼んでいたため、この貿易を「南蛮貿易」といいます。

1549年には宣教師フランシスコ・ザビエルが鹿児島に来航し、キリスト教を伝えました。



▲ 絵画にえがかれた南蛮人  
(牧 岐堂 作「春日浦の景」(大分市美術館蔵))

戦国大名の中には、キリスト教の布教を認め、自らも洗礼を受けて、キリシタンになる者も現れました。こうした大名をキリシタン大名といい、大友宗麟はその代表的な人物です。

宗麟とザビエルの出会いをきっかけに、ポルトガルとの本格的な交流が始まりました。府内の港である沖の浜には南蛮船が来航し、南蛮貿易が盛んに行われました。宗麟は中国や東南アジアにも直接貿易船を派遣して積極的に貿易を行いました。これらの貿易により、府内にはそれまでの日本にはなかった品々や文化・技術などが輸入されるようになりました。

府内のまちの発掘では、南蛮貿易が行われていた様子を具体的に示す外国産の陶磁器の破片が大量に出土しています。これらの陶磁器は、中国、朝鮮半島、ベトナム、タイ、ミャンマーなどで焼かれたもので、ポルトガル船や中国船が持ち込んだものです。



▲発掘調査で出土した外国産陶磁器

その他、南ヨーロッパ産と考えられるガラスの破片も見つかっています。

また、江戸時代に書かれた農業書によると、日本へのかぼちゃの伝来はポルトガル人が宗麟へ送ったのが最初であるとされています。当時持ち込まれた品種は現在まで受けつがれ、「南蛮かぼちゃ」や「宗麟かぼちゃ」などと呼ばれています。



▲南蛮かぼちゃ

#### 【コラム】南蛮貿易で取り引きされた品々

輸入品：生糸・絹織物・鉄砲・硝石・砂糖・ガラス製品・時計・望遠鏡・ワイン・砂時計・革製品・コショウなど  
輸出品：銀・硫黄・刀剣・海産物・漆器など

硫黄は火薬の材料で、鉄砲を使用するためにはなくてはならないものでした。豊後国には硫黄がたくさん取れる硫黄山(現在の九重町)があり、とても重要な輸出品でした。

## 2 栄える南蛮文化

府内のまちには約5000軒の家が建ち並び、多くの人々が暮らしていたとされています。ポルトガル商人や宣教師、中国や東南アジアの人たちが行きかうにぎやかな国際貿易都市でした。

1551年にポルトガル船が初めて来航した府内は、のちに南蛮貿易の拠点となる長崎の開港より20年近く前にヨーロッパの文化を受け入れた土地であり、まさに「南蛮文化発祥の地」でした。

### 《西洋音楽の発祥》

1556年には、府内の教会に聖歌隊が誕生しました。教会では日本人と中国人に対してローマ字の読み書き、歌と楽器「ビオラ」の指導が行われました。

府内教会で宣教師が宗麟を招いて食事会を行ったとき、少年たちがビオラを演奏して歓迎しました。また、聖歌隊は豊後各地を巡回し、横瀬浦(長崎県)の教会も訪れ、西洋楽器の演奏を伴い、聖歌を歌いました。

日本には珍しいオルガンも輸入されました。オルガンは当時日本には2台しかなく、1台は宗麟、1台は織田信長のもとにあったといわれています。オルガンは珍しい楽器であったため、その演奏を聴いた人々は大変驚きました。



▲西洋劇発祥記念碑(大分市大手町)

### 《西洋劇の発祥》

教会では、西洋風の演劇を通して聖書の教えを広める活動も行われました。1560年のクリスマスには、府内教会で「アダムの堕落と贖罪の希望」「ソロモンの裁判を願った二人の婦人」(上の写真の記念碑)などが演じられたという記録があります。

劇のストーリーは人物の演技でわかるように演出し、必要なところは登場人物が日本語の歌で語ったり、合唱によって説明をしました。今でいうミュージカル風の劇だったようです。

### 《府内教会》

1553年ごろまでに礼拝堂、宣教師の住む修道院のほかに、十字架・菜園・共同墓地などがある府内教会(デ

ウス堂)が宗麟の援助で建てられました。

教会では毎日ミサ(感謝の祭典)が行われていました。クリスマスや復活祭(イースター)などの行事も行われました。

クリスマスの時には、木の幹を切り、それで新しい十字架を作り飾っていました。

復活祭の時には、日本人の聖歌隊が聖歌を歌い、牛肉を炊きこんだご飯がふるまわれたこともありました。

府内のまちでは、いのりの時刻を知らせる教会の鐘が鳴り響いたともいわれています。

### 《宣教師の学校》

府内には、日本で初めて宣教師のための高等教育機関である「コレジオ」が建てられました。

府内コレジオでは神学や外国語、古典文学、哲学、天文学、気象学、音楽などの授業が行われました。

## 3 アルメイダと府内の人々

ポルトガルの商人で医師でもあったルイス・デ・アルメイダは、日本でキリスト教の宣教師となりました。



▲育児院と牛乳の記念碑(大分市大手町)

### 《育児院の設立》

戦国時代の日本では、貧しく生活に苦しむ人々の中には生まれた赤ん坊を手放す人がいました。

このことに心を痛めたアルメイダは、子どもたちの命を救うため、1555年に自らのお金を使って育児院を建てました。育児院では2頭の雌牛を飼い、牛乳を飲ませて子どもたちを育てました。



▲西洋医術発祥記念像(大分市大手町)

## 《西洋医術の発祥》

育児院はその後、外科と内科を備えた日本初の西洋式病院となりました。病院では、外科手術がアルメイダによって行われました。

外科はアルメイダが担当し、鉄砲や刀による傷の手術などを行いました。アルメイダの医療技術は日本の当時の水準よりはるかに優れており、10年、20年も治らなかった病気や傷が治療され、15日間で全快したという記録もあります。

内科は日本人のパウロが担当し、薬などを使って治療を行いました。パウロは24歳の若さで亡くなったため、ミゲルと内田トメが引きつぎました。

府内病院は評判となり、京都や堺(大阪府)あたりからも府内まで多くの人々が治療に来ました。



▲府内病院復元模型  
(大分市医師会立アルメイダ病院蔵)

木造の病院には16室の病室があり、12人の職員が働いていました。12人の職員は、「ミゼリコルディア(慈悲の組)」とよばれるボランティア組織の人々でした。

ミゼリコルディアの目的は、病院における医療活動と貧しい人々を救うことでした。

府内病院の活動は、多くの人々のボランティア組織によって支えられました。このような活動も日本で最初といわれています。

## 第6章 府内の人々のいのり

### 1 いのりの道具

戦国時代の府内のまちには、数多くの寺社がありました。また、宗麟そうりんの時代には大友館やかたの近くにキリスト教の教会が建てられました。

府内の人々は、これらの寺社や教会を大切にしました。府内の発掘調査では、当時の

人々が仏教やキリスト教を信仰しんこう（信じること）していたことがわかる道具がたくさん見つかっています。また、災害や病気から身を守るためのお守りや、まじないの道具も出土しており、当時の人々のいのりの様子がわかります。



▲犬形土製品



▲府内のまちで見つかったメダイ(メダル)とコンタ(数珠)

メダイとコンタは、ロザリオと呼ばれるキリスト教の祈りの道具の一部です。キリスト教信者は、ロザリオを手に持って祈りました。



### 【コラム】ヴェロニカのメダイ

2024年、大友氏遺跡の発掘調査で「ヴェロニカのメダイ」が発見されました。「ヴェロニカ」とは、キリストがゴルゴダの丘へ向かう途中に、まとっていたヴェールでキリストの顔の血と汗を拭った女性のことで、そのヴェールにはキリストの顔が映し出されたといわれています。その布に映ったキリストの顔が描かれたメダイを「ヴェロニカのメダイ」といいます。このメダイが国内で出土したのは2例目であり、日本でいち早く南蛮文化が花開いた「国際貿易都市」大分の歴史を物語る貴重な資料です。



▲キリストの顔

▲キリストを抱く聖母マリア

### 2 府内のまちの寺院

府内のまちには、大智寺だいちじ・来迎寺らいごうじ・光西寺こうさいじ・本光寺ほんこうじ・善巧寺ぜんぎょうじなど多くの寺院がありました。そのひとつである万寿寺まんじゅうじは、当時の敷地内の発掘調査が行われ、昔の様子がわかる出土品が数多く発見されています。



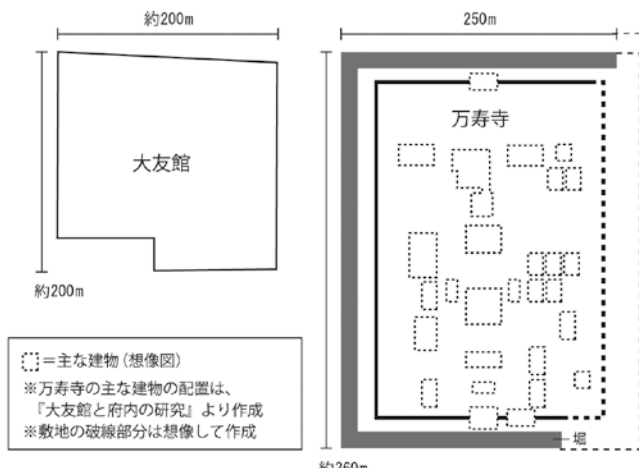
▲万寿寺跡出土の鬼瓦  
(大分県立埋蔵文化財センター蔵)

当時の万寿寺は、現在の大分市元町もとまちにありました。宗麟そうりんや義統よしむねの時代には大友館よりも広い敷地を持つ、地方最大級の大きな寺でした。堀で囲まれた南北約360m、東西250m以上の範囲はんいに60をこえる建物があり、100～150人ほどの僧そうが住んでいたと考えられています。

府内のまちとともに栄えた万寿寺は16世紀末に焼失し、江戸時代に現在の大分市金池町に再建されました。跡地は江戸時代以降、農地などとして利用されてきましたが、現在は大友氏遺跡のひとつとして国の史跡に指定され、大切に保護されています。



▲万寿寺跡から出土した銭  
(大分県立埋蔵文化財センター蔵)



▲大友館と万寿寺の面積比較(宗麟・義統のころ)

### 3 神社と祭り

戦国時代の府内には、特に盛大だったと記録されている祭りがふたつありました。由原(杵原)八幡宮の放生会と、府内祇園社の祇園会です。



▲杵原八幡宮(大分市八幡)

#### 《由原八幡宮と放生会》

由原八幡宮は9世紀前半に建てられたといわれる神社です。武運の神として武士たちの信仰を集め、大友氏からも大切に保護されました。

由原八幡宮の放生会は毎年旧暦8月(現在の9月ごろ)に行われました。放生会とは、生き物に感謝を表して命の大切さを人々に教える祭りです。

江戸時代に入ってからからの放生会では、現在の大分市上八幡にある本宮から生石の浜まで神輿が出るほか、田楽や相撲などが行われました。それらを見物しようと各地から訪れる参拝者を目当てに、食べ物などを売る店が数多く出て、大いににぎわいました。その様子は、「西日本の三大市」と呼ばれるほど盛大なものでした。



▲放生会

## 《府内祇園社と祇園会》

祇園社は、病気の流行を支配する牛頭天王という神をまつた神社です。牛頭天王にいのりをささげて病気の流行を抑えようとする祭りを祇園会と呼び、全国の祇園社で行われています。

宗麟の父である義鑑によって建てられたと考えられる府内祇園社は、府内のまちの入口付近にあたる現在の<sup>もとまち</sup>大分市元町と<sup>ふるこ</sup>古国府の境界付近にありました。江戸時代に場所を現在の<sup>うえの</sup>大分市上野に移し、<sup>やさか</sup>弥栄神社として今に続いています。



▲絵馬にえがかれた祇園会の山車(江戸時代)

府内祇園会は、毎年旧暦6月(現在の7月ごろ)に数日にわたって行われました。獅子舞が出るほか、神輿

が担がれ、きらびやかな山鉾を載せた何台もの曳山(山車)が、太鼓や笛を演奏する人々を乗せて、にぎやかに府内のまちを巡りました。

曳山を見物するために、府内の道に沿って多くの見物席が設けられ、たくさんの人々が座って祭りを楽しみました。

府内祇園会には毎年、大勢の見物人が訪れて大変な賑わいを見せました。1580年ごろには1万~2万5000人前後の人々が訪れたということです。

大友氏の時代から江戸時代まで受けつがれた祭りの形は、明治時代以後に失われました。しかし、弥栄神社には、江戸時代の曳山に使われた大きな木製車輪が残っており、当時の祇園会の様子を今に伝えています。



▲今も残る山車の木製車輪  
江戸時代につくられたものと思われず。

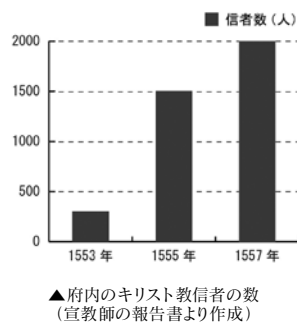
## 4 豊後府内とキリスト教

### 《府内での布教と人々への広まり》

1551年、宗麟がザビエルにキリスト教布教の許可をあたえたことから、府内での布教が始まりました。

宗麟は宣教師たちに土地と建物をあたえ、布教活動を保護しました。

現在の<sup>けんたくまち</sup>大分市<sup>けんたくまち</sup>顕徳町付近に建てられた府内教会を中心に布教が行われ、信者は増えていきました。1557年には2000人のクリシタンが府内にいたといわれています。



布教活動は豊後国(大分県)全体に広がり、現在の<sup>おおざい</sup>大分市<sup>おおざい</sup>大在や<sup>はんた</sup>判田<sup>はんた</sup>、<sup>うすき</sup>臼杵市<sup>うすき</sup>など各地に教会が建てられました。大友家の有力な家臣を含む多くの人々がクリシタンとなり、豊後国と府内は日本におけるキリスト教布教の中心地となりました。

### 《キリスト教の取りしまりと豊後崩れ》

1586年、豊後国に攻め込んだ島津軍によって、各地の寺社や教会は多くの被害を受けました。府内教会も一部の建物を残して壊され、宣教師たちの多くは山口や長崎などに避難しました。

キリスト教を保護してきた宗麟が1587年に亡くなると、その後をついだ義統は、同年に出された豊臣秀吉のバテレン(宣教師)追放令に従って、豊後国から宣教師たちを追放しようとした。しかし、クリシタンとなっていた大友家の家臣たちがキリスト教を保護したこともあり、豊後国でのキリスト教の信仰は続きました。

江戸時代になると、幕府はキリスト教禁止令(禁教令)を出し、日本全国のクリシタンを厳しく取りしまりました。クリシタンを発見するために絵踏が行われ、信じることをやめないクリシタンは処刑されました。豊後国でも幕府の禁教令に従って厳しい弾圧が行われました。

1659年、現在の<sup>たかた</sup>大分市高田<sup>たかた</sup>で約70人の男女がクリシタンとして捕えられました。それをきっかけに豊後国各地で次々とクリシタンが捕えられ、多くの信者の命がうばわれました。17世紀後半までに1000人をこえる人々が捕えられたこの事件は「豊後崩れ」と

呼ばれています。幕府の禁教政策によって、宗麟の時代から続いた豊後国でのキリスト教の信仰は、大きな打撃を受けました。

厳しい取りしまりから逃れるため、人々はキリシタンの証拠となる道具類を家の中や土中に隠しました。1965年に大分市丹生の畑で発見された壺の中からは、キリスト教のいのりに使われた道具がたくさん見つかっています。

### 《天正遣欧少年使節》

1582年、日本で活動していた宣教師たちは、日本での布教の成果をヨーロッパの人々に示すために、宗麟などのキリシタン大名が派遣した使節として、伊東マンショなど4人の少年たちを送り出しました。彼らを「天正遣欧少年使節」と呼びます。



▲天正遣欧少年使節の主な寄港地(破線は帰路)

約2年半の船旅のあと、ポルトガルリスボンに到着した少年たちは、ヨーロッパ各地で熱烈な歓迎を受けました。彼らは、ローマ教皇をはじめ各地の王や貴族に対面して使節としての役目を果たし、1590年に帰国しました。



江戸時代に行われた禁教政策のために、天正遣欧少年使節は日本では長く忘れ去られた存在でした。1873年、明治政府の派遣した岩倉使節団がイタリアで彼らの資料を発見したことから、16世紀に海をわたった少年たちの存在が、あらためて注目されることになりました。

主席正使	伊東マンショ(13歳)	宗麟の遠い親戚。帰国後は日本で布教活動を行う。
正使	千々石ミゲル(13歳)	キリシタン大名大村純忠の甥であり、馬晴信の従兄弟。
副使	中浦ジュリアン(14歳)	帰国後、日本で布教活動を行う。その功績などが認められ、のちに「福者」となった。
副使	原マルティノ(13歳)	帰国後は、日本やマカオで布教活動を行う。

▲4人の少年使節(出発当時の年齢)

《中央地区》

【大友氏遺跡(顕徳町・元町・六坊北町・上野町)】

大友氏遺跡は、大友氏の居館であった「大友氏館跡」、かつて万寿寺があった「旧万寿寺地区」、多くの外国人(中国人など)が生活していたと考えられる「唐人町跡」、大友氏が管理する蔵などの施設があったと考えられている「推定御蔵場跡」、大友氏の守りのための館であった「上原館跡」の5つの遺跡で構成されています。

2001年に大友氏館跡が国の史跡に指定され、その後、他の4つの遺跡も追加指定されました。

【デウス堂跡(顕徳町)】

デウス堂跡は、「府内古図」に「ダイウス堂」と書かれている場所です。ここに、キリスト教の教会があったと考えられています。

JRの高架線路をつくるために発掘調査を行ったところ、キリシタンのものとみられる墓が見つかりました。

【万寿寺(金池町)】

1306年に大友氏第5代当主貞親が建てたといわれ

ています。

宗麟や義統の時代には禅宗寺院としては地方最大規模の寺であり、現在の大分市元町にありました。16世紀末に焼失し、現在は大分市金池町に再建されています。

【大智寺(金池町)】

「府内古図」にえがかれている寺で、1387年に大友氏第11代当主親著が建てたといわれています。島津軍が府内に攻め込んだときにも焼けず、現在まで同じ場所にあります。

【若宮八幡社(上野町)】

大友氏初代当主能直が建てたといわれています。宗麟の父義鑑や宗麟が社殿を修理するなど、大友氏代々の当主が大切にしました。「府内教会」で使用されたと考えられている「花クルスの台石」が置かれています。

【南蛮貿易場跡(勢家町)】

この付近は、現在は陸地となっていますが、大友氏の時代には海岸でした。府内は南蛮貿易により繁栄しましたが、貿易船はこの付近にあった「沖の浜」という港に來航していました。現在は公園になり、大友宗麟像が立っています。

## 【<sup>やさか</sup>弥<sup>うえのがおか</sup>栄<sup>う</sup>神社<sup>の</sup>(<sup>う</sup>上<sup>の</sup>野<sup>の</sup>丘<sup>の</sup>)】

以前は古国府地区にあり、祇園社といわれていました。この神社の祭りである祇園会は豊後国だけでなく各地から人が集まる盛大な祭りで、宗麟が大阪(坂)城に行ったとき、その建設に関わる人の多さを表すのにこの祭りの参加者の数と比べた手紙が残されています。

## 【<sup>こんごうほうかい</sup>金剛宝戒寺<sup>(</sup>上<sup>の</sup>野<sup>の</sup>丘<sup>)</sup>】

奈良時代に古国府地区に建てられたとされています。大友氏第6代当主貞宗が現在の場所に移して建て直しました。

## 【<sup>えんじゆ</sup>円寿寺<sup>(</sup>上<sup>の</sup>野<sup>の</sup>丘<sup>西</sup>)】

大友氏が大切にした寺で、大友氏第6代当主貞宗が現在の場所に移しました。大友氏第22代当主義統が朝鮮へ向かうときに、無事をいのるよう頼んだという古文書が残されています。現在でも六坊町という地名がありますが、これはかつて円寿寺に坊(僧の住まい)があったことに由来しています。

## 【<sup>ゆすはらちまんぐう</sup>柞原八幡宮<sup>(</sup>八<sup>の</sup>幡<sup>)</sup>】

古い時代の手紙などには「由原八幡宮」と書かれています。

大友氏が代々大切にし、修理、寄進を行うなど手厚

く保護してきました。神社には大友氏が寄付したときれる甲冑が今も残っています。この神社の建物の多くは国の指定文化財になっています。

## 【<sup>はま</sup>浜<sup>の</sup>市<sup>(</sup>市<sup>)</sup>】

「放生会」と呼ばれる神事(神に関する行事)に伴う市です。

江戸時代には金刀比羅宮(香川県)の金市、宮島(広島県)の船市と並び「西日本の三大市」のひとつに数えられ、記録によると8万人が訪れるほどのにぎわいだったようです。大友氏の当主もこの「放生会」に参加しました。

## 【<sup>たかさきじょうあと</sup>高崎城跡<sup>(</sup>神<sup>崎</sup>)】

高崎山の山頂にあった大友氏の山城で、現在でも堀などの城をまもるための仕掛けが残っています。室町時代や戦国時代に戦いがあると大友氏がたてこもっており、高崎城と上原館を行き来できるよう道が造られていました。

## 【<sup>まるやま</sup>丸山城跡<sup>(</sup>金<sup>谷</sup>追<sup>)</sup>】

上原館と高崎城を結ぶ道のほぼ中間地点にある山城で、堀などが残っています。また、現在でも周辺に「城の脇」や「城山南平」といった地名が残っています。

もりおかとりであと まがり  
**【守岡砦跡(曲)】**

大友氏第22代当主義統が整備をしたとみられています。1975年から76年にかけて行われた森岡小学校の建設のための発掘調査では、柵や建物跡、16世紀のかわらけなどが見つかっています。

おんしやくまのじんじや つもり  
**【御社熊野神社(津守)】**

大友氏初代当主能直が建てたといわれています。大友氏の時代、津守には和歌山県にある熊野本宮の土地とされていた場所があったという記録があり、御社熊野神社と熊野本宮の関わりが指摘されています。

江戸時代に豊後国に流された徳川家康の孫の松平忠直(一伯)が大切にし、社殿などを再建しました。

**《西部地区》**

ささむた そうだ  
**【西寒多神社(寒田)】**

平安時代にはすでにあつたという記録があり、大友氏第10代親世が現在の場所に移転させたとされています。神社には大友氏ゆかりの品々が収められています。また、「神庫」は大分市の指定文化財になっています。

よりやす おかがわ  
**【大友頼泰墓(岡川)】**

大友氏第3代当主頼泰の墓です。大友氏は頼泰のころから豊後国に住み始めたといわれています。頼泰は中国(元)軍が攻めてきたときに九州の武士たちを率いて戦いました。

おぎじょう たまぎわ  
**【雄城城跡(玉沢)】**

現在の<sup>おぎのだい</sup>大分雄城台高校のある台地上にあつたと考えられている城です。雄城若狭守という人の居城だったといわれています。

かく かく  
**【賀来氏館跡(賀来)】**

賀来氏は現在の<sup>かく</sup>大分市賀来を中心とする地域の領主で、この地域の<sup>じとう</sup>地頭や<sup>しんしよく</sup>柞原八幡宮の神職を務めていました。賀来小中学校の敷地で行った発掘調査では、鎌倉時代の建物跡などが発見され、これが賀来氏館の一部とみられています。

かく  
**【賀来の市】**

賀来神社にまつられている神様は、普段は柞原八幡宮にいますが、年に1度賀来神社に還ることになっており、その帰還を祝うお祭りに伴う市です。現在は6年に1度「<sup>うとり</sup>卯酉の神事」という神事が行われています。この「賀来神社卯酉の神事」は県の指定文化財になっ

ています。

### 【<sup>わしがじょうあと のつはる</sup>鷺ヶ城跡(野津原)】

現在の<sup>おおい</sup>大分市野津原支所の南の山の上にあった城で、野津原城ともいいます。城の仕掛けなどはみられません<sup>が</sup>、記録などから<sup>うゑだ</sup>植田地区の領主であった<sup>うゑだ</sup>植田氏の城であったとみられています。

### 《南部地区》

#### 【<sup>つるが なかへつぎ</sup>鶴賀城跡(中戸次)】

<sup>としみつ</sup>利光氏の城で、<sup>しまづ</sup>島津軍が豊後に攻め込んだときには城主の<sup>そうぎよ</sup>利光宗魚を中心に守りを固め、<sup>こうげき</sup>島津軍の攻撃を何度も防ぎました。

この戦いで命を落とした宗魚の墓はふもとの<sup>じょうだいじ</sup>成大寺にあります。現在でも敵の攻撃を防ぐための仕掛けがよく残っています。

#### 【<sup>へつぎ</sup>ほうちょう(戸次地区)】

戸次地区の郷土料理です。<sup>えど</sup>江戸時代の史料によると<sup>そうりん あわび ちょう</sup>宗麟は鮑の腸が大好きでしたが、ある年不漁で入手できませんでした。そのときに<sup>かしん</sup>家臣が小麦粉で似せてつくった料理といわれています。「戸次のほうちょう作り」は<sup>おおい</sup>大分市の無形民俗文化財に指定されています。

#### 【<sup>ちようそかべのぶちか こうぼ かみへつぎ</sup>長宗我部信親公墓(上戸次)】

長宗我部信親は<sup>とさ こうち</sup>土佐国(高知県)の戦国大名長宗我部<sup>もとちか</sup>元親の長男です。<sup>とよとみひでよし</sup>豊臣秀吉の命令で大友家をたすけるために豊後に来て<sup>ぶんご</sup>島津軍と戦い、<sup>へつぎがわ</sup>戸次川の戦いで命を落としました。

元親は信親をあとつぎとして大変かわいがっており、その死は元親を大変悲しませました。

#### 【<sup>てんめんざん かわらうち</sup>天面山城跡(河原内)】

天面山の山頂にあった城で、<sup>せ</sup>島津軍が豊後に攻め込んだときに<sup>しばたじょうあん</sup>大友氏に対して反乱を起こした<sup>せめ</sup>柴田紹安がたてこもりました。

現在は公園となっており、城の仕掛けの一部が残っています。

#### 【<sup>かがみ なかへつぎ</sup>鏡城跡(中戸次)】

戸次川の戦いのとき、援軍にかけつけた長宗我部元親ら<sup>しこく</sup>四国連合軍がここに集まり作戦会議を行いました。

#### 【<sup>へつぎがわこせんじょうあと</sup>戸次川古戦場跡(中戸次)】

1586年に<sup>しまづ</sup>島津軍は豊後国に攻め込み、府内を目指します。その途中、戸次川で<sup>しこく</sup>大友・四国連合軍と戦いました。この戦いに勝った<sup>しまづ</sup>島津軍は、府内へ進攻し、府内

のまちの多くは焼失しました。

## 《東部地区》

### 【千歳城跡(千歳)】

東西約132m、南北約140mの四角い館城だつたと考えられています。宗麟の時代は吉岡氏の城でした。江戸時代にはすぐ近くに延岡藩の役所がおかれました。一部は現在児童公園となっています。

### 【鶴崎城跡(鶴崎)】

島津軍が豊後に攻め込んできたときに吉岡妙林尼が守った城です。城主は宗麟に従い丹生島城を守っており、城にはわずかな人数しかいませんでした。ほかの地域では島津軍が有利に戦いを進めるなか、妙林尼はよく戦い、島津軍に何度も勝利しました。

### 【鶴崎踊(鶴崎地区)】

宗麟のふるまいをいさめるため、家臣の戸次鑑連(道雪)が京都から踊り子を招いて踊らせたことが始まりと伝えられています。軽快なテンポの「左衛門(三つ拍子)」としっかりと優雅な「猿丸太夫」の2つの踊りが現在まで受けつがれています。現在では「本場鶴崎踊大会」として8月の旧盆過ぎの土・日曜日の夜に鶴崎公園グラウンドで開かれています。鶴崎踊は国・県の選択

無形文化財、市の無形文化財に指定されています。

### 【キリシタン殉教公園(葛木)】

宗麟がキリスト教を保護したため、豊後国には多くのキリシタンがいました。しかし、宗麟の死後、禁教令が出されると、江戸幕府によるキリシタンの取りしまりが始まります。葛木地区では約200人が捕えられて命を落とし、そのひどさからこの地域は「獄門原」と呼ばれるようになりました。1970年に公園が造られ、キリシタンの歴史を今に伝えています。

### 【丹生キリシタン遺物出土地(丹生)】

1965年、丹生の畑から、古い壺がひとつ見つかりました。壺の中には、キリスト教のいのりに使われる道具がたくさん入っていました。出土品は現在長崎市にある「日本二十六聖人記念館」で展示されています。大分にキリシタンがいたことを示す大変貴重な遺物です。

### 【大友親著墓(丹生)】

大友親著は大友氏第11代の当主で、豊後国の守護だけでなく、筑後国(福岡県)の守護にも任命され、勢力を広げました。しかし、第12代当主の座をめぐる反乱がおこりました(三角島の乱)。この墓は江戸時代

に子孫の松野外記が建てたものといわれています。

### 【摺木砦跡(一尺屋)】

戦国時代、一尺屋は大友水軍の主力として活躍した若林水軍の港として重要な場所でした。砦は南北に長い特徴的な形をしており、石積みなど敵の侵入を防ぐための仕掛けが現在も残っています。

### 【烏帽子岳城跡(関・白木・志生木)】

大友氏家臣の佐伯惟教が守っていた城です。標高267mの城山山頂にあり、豊後水道を広く見渡すことができる場所にありました。そのながめの良さから第二次世界大戦中には大砲が設置されていました。敵の侵入を防ぐためのさまざまな仕掛けが現在でも残っています。

### 写真等提供者(敬称略・五十音順)

大分県立埋蔵文化財センター

大分市歴史資料館

靖國神社 遊就館

柞原八幡宮

### 参考文献一覧

『6年 郷土学習資料「府内から世界へ 大友宗麟」』

大分市教育委員会

『大分県先哲叢書「大友宗麟資料集」』大分県立先哲史料館

『大分市史』上・中・下 大分市

『大分市伝統文化調査報告書』大分市教育委員会

『大分の中世城館』大分県教育委員会

『大友氏館跡2』大分市教育委員会

『大友館と府内の研究「大友家年中作法日記を読む」』大友館研究会編

『完訳フロイス日本史』6・7・8 フロイス著 松田毅一・川崎桃太訳

『史跡大友氏遺跡整備基本計画(第1期)』大分市教育委員会

『史跡大友氏遺跡保存管理計画書』大分市教育委員会

『十六・七世紀イエズス会日本報告集』松田毅一監訳

『小学社会 6年』上 日本文教出版株式会社

『新編 新しい社会 歴史』 東京書籍株式会社  
『中世大友再発見フォーラムII 府内のまち 宗麟の  
栄華』 大分市教育委員会  
『豊の都市 おおいた 歴史散歩』 大分市  
『南蛮屏風の世界 ～描かれた都市の賑わい～』 大分  
市歴史資料館  
『日本キリスト教史』 五野井隆史著

## 大友宗麟と府内のまち

初 版 2018(平成30)年12月1日  
第9版 2026(令和8)年5月1日  
発行者 大分市教育委員会  
〒870-8504  
大分市荷揚町2番31号  
文化財課  
TEL097-537-5682(直通)

